ピニャテル父子

澤　　護

V.ピニャテル（Pignatel, Victor Leopold）の名前がある程度話題になり人名辞典などに掲載されているのは，彼が長崎・丸山の遊女・正木を身受けし溺愛したこと，正木の死後40年にも渡って彼女の遺品である朱色の筥枕を抱いて寝ていたこと，さらにそれを斎藤茂吉が短歌に詠ったことによる。ところで，最近刊行された人物・人名辞典によると，ピニャテルに関しては次のように記載されている。

「幕末明治期に来日したフランス人貿易商。フランスのリヨン生まれ。1848年革命を避けて一家をあげて母の故国ロンドンに移住。文久1(1861)年父と共に長崎に来日，出島町5番地に住み洋品貿易商を営む。明治3（1870）年父の没後，家業を継ぐ。50歳まで未婚で過ごしたが，のち丸山の遊女まさきを愛人として迎える。3年後まさきと死別，愛惜孤独の生活を送った。この生活心情を知った斎藤茂吉はピニャテルにあい，歌集『つゆぐも』に「うら悲しゆふべなれどもピナテールが寝所(ふしど)おもひて心なごまん」ほか一連の短歌を発表，これによってピニャテルの名は有名となる。長崎で没した。」[1)]

「1846年8月17日フランスのリヨンに生まれた。ピニャテール家はリヨンの旧家で父親のウージェーヌ・ピニャテールは雑貨貿易商でイギリス女性を妻とし，富裕な生活を営んでいた。1848年の革命で戦火を避けてイギリスに渡り，ロンドンに移った。彼はわずか2歳であった。1861年

8月父親と2人でロンドンに家族を残したまま，上海経由で長崎に来日した。弟のシャルルも同行したが彼と性格が合わず，長崎を去って佐賀藩の英語教師となった。父の没後ピニャテール商会の経営に専念し大いに成功した。たまたま長崎丸山の正木を知り彼女を溺愛した。正木が病歿すると人物が変わり，破れた衣一枚で長崎の街を歩き廻るようになり「西洋パンザ」と仇名されるほどになった。パンザとは乞食という意味である。1922年1月30日長崎在住60年の生涯を閉じた。生前，吝嗇漢といわれ乞食同様の生活をしたが，歿後寝室から邦貨30万円という大金が発見され大ニュースとなった。斎藤茂吉にはピニャテールをうたった歌がいくつかある。」[2)]

このふたつの記述は基本的なところではなんら変わるところがなく，1848年のロンドン移住，1861年の来日などは同一で，これ以前に書かれた資料を典拠にしているのは明らかである。ピニャテルを取り上げた小伝や新聞・雑誌記事は他にいくつもあるが，どれも先のふたつの事柄はほぼ同じで，中には1863年の来日としたものもある。結論的な言い方をすると，ピニャテルに関する新しい資料の発見や，先の事柄を訂正する発表はこゝ数十年以上に渡ってなかったということである。細かな点は別にしても，1848年のロンドン移住と1861年の来日という彼に関する重要なポイントは，いずれも誤りであると言わなければならないようである。

1848年フランスで二月革命がおこり，これを逃がれるためロンドンへ渡った。ヴィクトール2歳の時であったとするのが長い間の定説になっている。しかし，これは明らかに違う。

V.ピニャテルの死後，ピニャテル父子宛の手紙が大量に発見され，これらは一括してある収集家の手元に納められた。昭和初年のことである。これらの手紙類は約20年前に別の収集家に譲り渡されたが，その際にこの貴重な手紙を調査する機会に恵まれた。これらの手紙は長崎のピニャテルに

宛たものばかりでなく，パリやマンチェスターに在住時代の父宛のものも数多く含まれていた。

リヨンのある商社よりパリ宛の最も遅い手紙は1859年8月23日付のリヨン局の日付を持つもので，マンチェスター宛の最も早いものは1859年9月19日のものであった。これらによると，少なくとも父・ユージェーヌ（Eugène）は1859年まではパリに住み，この年の8月下旬から9月上旬にかけてイギリスに渡ったことがわかる。

さらに，「かなり疲れているというお手紙を戴きとても心配しています」と書いた子・ヴィクトールより父宛の手紙が手元にあるが，この日付は1858年6月24日にリヨンよりパリに宛られたものだけに，1848年に戦火を避けてロンドンへ移住したとする記述は完全に否定しなければならないことになる。

マンチェスターの父宛の手紙はあまり多くなく，最も新しいものは1859年10月6日のものであった。つまり，イギリス在住を示す手紙は1859年9～10月中のものしかなく，極めて短期間だけここに滞在したことを窺わせている。

ところで，長崎のピニャテル宛の手紙で最も早いものは1860年12月24日の日付を持つリヨンのある商会出しのもので，この時にはすでに長崎で商売をしていたことになる。この時代，イギリスやフランスと結ぶ定期船はまだ運航されてないので，ピニャテルはあちこちで船を乗り換えて来日したわけだが，上海で乗船した船名でもわかるともう少し調査範囲が狭められるだろう。

「居留外国人人名録」を調べてみると，E.ピニャテルの名前は長崎・出島の在留フランス人として1862年版に掲載されているが，[3] 1861年版では未掲載である。一般にこの手の人名録はその年度の1月に刊行されるのが常であったので，その調査は前年に行われた。したがって，E.ピニャテルの1861年の長崎居留はまず間違いのないところだが，1860年来日を示す資料

は先の手紙の他にもう1点ある。

当時の在長崎イギリス領事・モリソン（Geo. S. Morrison）の所有だったらしい1葉の「長崎の新居留地地図　1860年10月」と題する地図をみると，地番1より31番までの区画が示され，「1番Evans，2番Mackenzie，3番Walsh & Co.」などと並んでフランス人居留者として「9番Guaymans，10番Pignatel」が記載されている。[4] つまり，少なくともピニャテル父は1860年10月にはすでに長崎に来ていたことになり，1861年（8月）の来日もまた否定しなければならないことになる。なお，先の手紙の文面に「(1860年) 10月21日付貴書簡拝受」とあり，長崎でこの時にはすでに商売をしていたのは間違いない。

ピニャテル商会の地番は出島5番であったのに，先の地図では10番となっている点に疑問も生じようが，これはつぎの解釈で解決ができる。文久3年（1863）亥正月の「外國人名前調帳」[5] に「出島住居ピンヤーテル，大浦拾番佛ヒク子トル借地住居」とあり，ピニャテルは出島5番と大浦10番の2ヵ所に借地を所有していたからである。

父，ユージェヌが1860年に来日したとき，長男・ヴィクトールも一緒に同行したが，次男・シャルル（Charles）は後日来日したように言われている。しかし，これを証明する資料は全くなく，「居留外国人人名録」などでは息子たちの名前は1864年以降しかでてこない。

ヴィクトールの名前は慶応2年（1865）8月晦日の調帳に「出島五番地所住居ピンニャテル　倅ウィクトール　ヒンニャテル」[6] と書かれているのを皮切りに，それ以降各年度の各種ダイレクトリーに長年に渡って記載されている。その内の1870年版では，ヴィクトールは大阪に居留していることになっているのが，[7] これまでの調査では他に彼の大阪居留を示す記録はない。

次男・シャルルに関してはヴィクトールより早く元治元年（1864）に「南山手七番　佛蘭西コンシュル　エルテュリ，シャル，出島住居佛人ヒ

ピニャテル父子の年度毎確認表

	Eugène	Victor	Charles	参　考
1862	○			The China Directory
1863	○			「(長崎県居留)外國人名前調帳」
1864	○		○	C.は仏領事館
1865	○	○	○	C.は仏領事館助手
1866	○	○	○	C.は仏領事館書記・通訳
1867～1869	○	○	○	
1870	○	○	○	V.は大阪
1871		○	○	
1872		○	○	C.は不在
1873		○	○	
1874～1875		○	○	C.は佐賀
1876～1880		○	○	
1881		○	○	V.は不在
1882～1885		○	○	C.は不在

ンヤテル」[8]とあり，在長崎フランス領事館で通弁をしていたことを記録している。シャルルの生年月日は不明だが，ヴィクトールの年齢からみて15・16歳かで通訳をしていたことになる。なお，先の「エルテュリ」とは1862年5月10日に来日し，1862年11月から長崎でフランス副領事の任についたレオン・デュリー（Léon Dury）のことである。

ダイレクトリーの1874・1875年版ではシャルルは佐賀に在留しているようになっているが，[9]彼は文部省雇いとして明治4年4月1日より同6年4月26日まで佐賀藩で英語を教えていたことからこのような記録になったのだろう。その後，彼の名前はヴィクトールと共に1881年版まで記載されて

いるが，1882年版よりしばらくの間シャルルの名前の後にabsentとなって記録されている。ダイレクトリーから推定する限り，彼は1881年に日本を離れたものとみなされる。

日本と上海・香港とを結ぶ定期航路さえないときの父親の来日であっただけに，息子２人も一緒に同行していたと考えるのが自然のように想われてならない。

父・ユージェーヌの名前は1870年版を最後にダイレクトリーから消える。彼はこの年の９月１日に54歳で逝去したからである。父の墓は旧大浦外国人埋葬地，現在の荒れ果てた川上町外国人墓地にあり，「EUGENE PIGNATEL」と刻まれた下に1870年９月１日没の横文字が入った墓誌銘があるが，これは遠からず判読もできなくなることだろう。

ヴィクトールの墓は父とは違った坂本町国際外人墓地の北区にある。この墓地の入口近くの案内版には「……遊女の形見の枕とともに四十年の独身生活を続けたという仏人ピナテールの墓……もある」と書かれていた。この案内版が正しいとすれば，ヴィクトールは遊女・正木と死別したのは1882年（明治15）頃で36歳の時になる。とすれば，先に示した人物事典の「50歳まで未婚で過ごした」とする記述とどう辻褄が合うのだろうか。

ヴィクトールが死んだあと「東洋日の出新聞」はなん回か彼に関する記事を掲載したが，その中に「(丸山遊廓角の油屋というところにいた正木という美妓は）華麗な引祝の後，花々しく此出島町のピニヤテル家へ引取られたのであった。三十年来淋しい孤獨に倦み果てたピ氏は戀焦れた女を得てからは，全てが一變して金銀等を惜しまなかつた事は勿論，之に渾身の愛を注ぐのであつた（句読点は筆者)。」[10]との記事がある。正木は身受けされてからわずか３年で病死したようだが，この記事には何時頃のことであるのか年代の記載は一切ない。ただ，30歳頃に正木と同棲し，３年後に彼女を失くしてからは人が変わり，以後40年間彼女の朱の筥枕を抱いて独身を続けたとすればある程度の辻褄は合う。この新聞記事によると，正木

の遺骨はヴィクトールの意志により彼女の身寄りの者が預かり，長崎の地を離れ葬られたとあるから，彼女の墓でも発見されると新しい進展があるだろうが，この期待は極めて薄いようである。

斎藤茂吉は長崎医学専門学校教授として赴任していた1920年（大正９）12月５日に，長崎高商教授・武藤長藏の案内で画家の三上知治と共に大浦天主堂を訪れ，その後でピニャテルの家を訪ねた。「午後ピナテール（Pignatel）翁を訪ふ」と書き記しているので彼に会ったものと想われるが，例え会ったとしてもピニャテルはかなり痴呆症が進んでいたので会話にならなかったはずである。

この日，斎藤茂吉は３首の歌を詠み，この前後に詠った２首を加えると５首のピニャテルについての歌がある。これら５首は，茂吉が大正６年12月から同10年３月までの長崎滞在中に，折りに触れ作った歌を中心に纏めた彼の第三歌集『つゆじも』に含まれている。

この５首の歌だが，実際に後になって茂吉が直したり補ったりしたのか不祥なだけに詳述はさけるとしても，ピニャテルについて書いた記事や論稿をみると，歌集『つゆじも』が『つゆもじ』だったり，『つゆぐも』になったりしている上に，仮名が漢字に直されたり，「は」が「わ」になったりでずいぶん違う。

昭和21年８月の第一刷，昭和26年４月の第三刷などを参照し，『つゆじも』に発表された５首を書き留めておく。

・長崎の港の岸をあゆみゐる
　　ピナテールこそあわれなりしか
・うらがなしき夕（ゆうべ）なれども
　　ピナテールが寝所（ふしど）おもひて心なごまむ
・寝所（ふしど）には括枕（くくりまくら）のかたはらに
　　朱（しゅ）の筥枕（はこまくら）置きつつあはれ

・冬の雨ふるけふをしも
　　Pignatel(ピナテル)が家をたづねて身にし染(し)むもの

・年老いてただひとりなるピナテール
　　寂(しづ)かなるごとくなほも起臥(おきふ)す

ピニャテル父子が住んだ家屋は，出島五番にあった。現在の出島町六番13号にあたり，いまそこには海江田病院が建っている。前院長の海江田紳氏とはなん度も会ったことがあるのに，一度もピニャテルのことを話し合うことないまま急逝されてしまった。痛恨の極みである。

坂本町外人墓地のヴィクトールの墓誌名は次のように刻まれている。

ICI
REPOSE
VICTOR LEOPOLD
PIGNATEL
NÉ A LYON FRANCE
LE 17 AOUT 1846
DÉCÉDÉ A NAGASAKI
LE 30 JANVIER 1922

ヴィクトールには姉と妹のふたりがいたとされているが，1866年1月9日付けのマンチェスターのY. Genthよりピニャテール父宛の手紙には，「3人のお嬢さんはとてもお元気で過ごしており，貴方様からのお便りを心待ちにしております」と書かれている。これも従来の記述と違う点である。

注 1) 『朝日日本歴史人物辞典』(1994.11.30刊)。1,375頁。
2) 『来日西洋人名事典（増補改訂普及版)』(1995.1.31刊)。312頁。
3) "The China Directory for 1862", pp.52 & 77.
4) M. Paske-Smith, "Western Barbarians in Japan and Formosa in

Tokugawa Days, 1603-1868", pp.234, 235の間に挿入されている地図。

5) 県立長崎図書館蔵。

6) 「慶応二年八月晦日改居留場外國人別調帳」。

7) "The Chronicle and Directory for the year 1870", p.267.

8) 「外國人名前調帳」(元治元年)。

9) "The China Directory for 1874", p.4V.
"The China Directory for 1875", p.4V.

10) 「東洋日の出新聞」(大正11.2.15)。